

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 橋爪 烈

本論文は、10世紀初頭からダイラム人の卓越した軍事力を基盤に勢力を拡大し、アッバース朝カリフから統治の実権を奪って、現在のイラクおよびイラン西半部に政権を樹立したブワイフ朝(932-1062)の構造をアラビア語史料を駆使して解明した論文である。ブワイフ朝は、スンナ派のカリフに対して、カスピ海南部の山岳地域の出身でシーア派を信奉するダイラム人を主体に成立した王朝としても知られている。ブワイフ朝以後、西アジア史はカリフの時代から軍事力を背景としたスルタンの時代へと大きく変貌することになる。

このようなブワイフ朝については、これまでに少なからぬ先行研究があり、M.Kabir(1964), H. Busse(1969), J.Donohue(2003)らがまとまった研究を世に問うてきた。これに対して、著者はおもに二つの点で問題を提起する。まず第一に、これまでの研究は史料の豊富なイラクの事例をもとにブワイフ朝の歴史像を描いてきたが、ブワイフ朝はすでに指摘されているようにイラク、ファールス、ジバールなどに成立した諸政権の連合政権であり、イラク政権の事例のみをもってブワイフ朝の構造を論じることはできない。第二に、先行研究はブワイフ朝君主は制御しにくいダイラム軍団に代えて、しだいにトルコ系奴隷軍人(アトラーク)を重用するようになったと指摘しているが、これもまたイラク政権の事例を偏重した結果であり、再検討を必要とする。

本論文は、以上の観点から、これまで詳しく検討されることのなかったファールスやジバールの政権について詳細な検討を加えている。論文の新しさはここにあり、その結果ブワイフ朝の連合政権としての構造がより明らかになり、とりわけ初期のブワイフ朝君主の間には一族の紐帯の象徴で、家長権とも言えるリアーサの観念が共有されていたことを指摘した。また第5章ではファールス政権の内情とダイラム人の動向が詳細に検討され、全体としてダイラム軍団はアトラークに取って代わられることなく、ブワイフ朝諸政権を支えていたことを明らかにした。さらに附論4としてつけられた『時代の鏡』研究は、今日には伝存していないブワイフ朝の同時代史料からの摘要を含む写本群に関する文献学的な研究の試みであり、厳密な史料批判をめざす著者の姿勢を明示している。

このように本論文は、ブワイフ朝の連合政権としての構造を明らかにするべく、アラビア語史料を渉獵して個々の政権の盛衰を描き出すことに成功している。しかし、その一方で史料の記述に引きずられた結果であろうか、叙述が個別のブワイフ朝君主やダイラム軍人の意図や行動の解釈に流れる傾向はいなめない。また、政治史の背後にあるはずの社会、経済的な要因への目配りも求めたい。今後は、ブワイフ朝国家論として議論の抽象度を高めることが望まれる。以上、本論文には今後克服すべき課題も認められるが、全体としてブワイフ朝の歴史像に肉薄した成果は評価に値する。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。